

## 『伝統的プログラム：技法あそびの実践状況について』 (保育者への質問紙調査をもとに)

金山 和彦

美術教育学

Present Situation of Traditional Program “Technical Drawing”

kazuhiko KANAYAMA

(2001年11月1日受理)

KEY WORD オートマティズム (Automatizm) 自動記述法

本文中では保育にかかるものを「技法あそび」と言い換えている。

### はじめに

保育士養成課程における造形表現テキストブックでは、遊び内容として「描画、版画、粘土、自然物など」のテーマがみられるが、これらにはすべて共通した技法あそびが紹介されている。それは一般に自動記述つまりオートマティズムといわれる技法であり、偶然出来た色形に意味をもたせ、見立て遊びや感覚遊びで楽しむ材料経験である。(吹き散らし、合せ絵、擦り出し、滲み絵等) モノの形をそれらしく描いたり作ったりするような写実描写をすることが容易ではない幼児、障害児にとっては、興味深い造形あそびの一つである。

技法遊びの一つであるフロッタージュなどは、1925年にシュールレアリズム期のマックスエルンストが発見し、『博物誌<sup>1)</sup>』の中で紹介している。更には、1950年代のアメリカ・アクションペインターのジャクソンポロック然り、イタリアルネサンス期のボッテチェルリまでもが、絵の具を含んだスポンジを画面に向かって投げ付けており、ドリッピングの要素を作家こそが先駆的に取り入れ

ている記述も窺える<sup>2)</sup>。つまり、幼児造形において伝統的とされている技法あそびは、本来、絵画作家によって創作された技法を継承しているということが考えられる。(なぜならば、1920年代の日本の美術教育が目と手の訓練、「鉛筆画帖」「毛筆画帖」「新定画帖」から継承される訓練主義的な臨画であり、偶然性を用いた画風は、当時、美術教育界に存在していないことから導き出せるのである。)

しかし、保育におけるこれらのあそびについての紹介は、現在のところ、手法だけに留まり、その意義や効果など、保育援助としての在り方・考え方が不在であるように思われる。故に保育実践現場においても「やりっぱなし」「たのしかった」止まりの活動になるのである。また、保護者の理解も「子どもの造形活動について偶然的造形作品よりも意図的な造形作品を好む傾向がある<sup>3)</sup>」ことが伺え、オートマティズムを稚拙な造形あそびと捉えている傾向があるといえる。伝統的プログラムである技法遊びは現在のところ、保育実践において有効に活用されているのであるのか。疑問が残るのである。

保育内容「表現」指導法・造形表現の授業後、「技法あそびの感想」について学生（1年生55名）へのアンケートを実施したところ、その大部分が「幼児の気持ちになり楽しめた」「上手下手がないので美術が嫌いな子どもも出来る」など、技法面からの楽しさ、容易さだけがみられ、技法あそびを通して幼児の様子を確認したり、作品の造形要素（構図・色面・質感）についてのコメントなどはみられなかった。これらの現状から、保育実践現場における技法あそびの在り方を再度検討していくべきであると考え。

本研究では、保育におけるオートマティズム技法あそびを「保育者の意識調査」から吟味し、その在り方を提示することを目的とする。

## 1. 調査研究～保育現場における技法あそび（オートマティズム）観についての質問紙調査

### (1) 研究内容

#### ①調査目的

保育実践現場では、オートマティズム技法あそびをどのように捉えているのか。保育実践現場の実践状況を把握することで、保育者の技法あそびに関する意識を明確にしていく。加えて保育実践現場における技法遊びの実践状況の把握から、保育者の造形遊びに関する嗜好性を確認したいと考える。

#### ②調査対象

島根県出雲市 公立保育園1園 8名

表1 技法遊びの実践状況

技法あそびの種類	実践したことがある	知っている	知らない
デカルコマニー（合せ絵）	23(32%)	58(81%)	14(19%)
ドリッピング（垂らし絵）	3(4%)	38(53%)	34(47%)
ストリングデザイン（引き糸）	10(14%)	46(64%)	26(36%)
吹き絵	18(25%)	43(60%)	29(40%)
ビー玉転がし	6(8%)	28(39%)	44(61%)
にじみ絵	12(17%)	40(56%)	32(44%)
マーブリング（墨流し）	24(33%)	65(90%)	7(10%)
フィンガーペインティング（指絵）	45(63%)	70(97%)	2(3%)
バチック（はじき絵）	27(38%)	49(68%)	23(32%)
ブラッシング（霧吹き絵）	13(18%)	55(76%)	17(24%)
フロッタージュ（擦り出し）	16(22%)	53(74%)	19(26%)
スクラッチ（引っ掻き絵）	23(32%)	52(72%)	20(28%)
モンタージュ（集め絵）	2(3%)	17(24%)	55(76%)
コラージュ（貼り絵）	24(33%)	72(100%)	0(0%)
あぶりだし	3(4%)	61(85%)	11(15%)
染紙	25(35%)	52(72%)	20(28%)
ローラー転がし	12(17%)	40(56%)	32(44%)
スタンプング（型押し）	41(57%)	65(90%)	7(10%)
粘土版画	3(4%)	30(42%)	42(58%)
スチロール版画	11(15%)	37(51%)	35(49%)
紙版画	15(21%)	61(85%)	11(15%)

（回答件数）

私立保育園 3 園

(11名、10名、6名)

新潟県上越市 私立幼稚園 1 園 7 名

東京都町田市 私立幼稚園 1 園 8 名

神奈川県横浜市 私立保育園 1 園 11名

保育者数計 72名 (質問紙回収率90%)

### ③調査時期

平成11年 6・7・8月

### ④調査内容「保育における技法あそびについて」の質問項目は次に示す7項目である。

- a, 「技法あそび」の種類と実践の様子
- b, 「技法あそび」の活用状況とその理由
- c, 「技法あそび」適用年齢
- d, 子どもの活動の様子
- e, 作品の読み取り・評価の視点
- f, 「技法あそび」についての意見

## (2) 調査結果

- a, 「技法あそび」の種類と実践の様子について  
回答結果は以下の通りである。

表1から保育者は、多様な技法あそびの種類を知り得ていることが分る。しかし、「ビー玉転がし」や「モンタージュ」「粘土版画」など一般に幼児造形のテキストでは紹介されにくい種類のものに関しては「知らない」と答えたものが比較的多い。また、この表1で特筆すべきは、「ストリングデザイン」「フロッタージュ」「あぶりだし」「紙版画」などについて保育者は高い割合で「知っている」と答えながらも、約半数以上の保育者が実践を行なった経験が無い現状が明確になったことである。また、実践経験の少ない技法遊び名から、保育者は概して素材の準備物が複数になるに従って、実践経験が少ないことが分かる。

- b, 「技法あそび」の活用状況

「技法遊びを保育の中に取り入れているのか」の質問に対する回答結果は、「取り入れている」と答えた保育者が96%、「取り入れていない」と答えた保育者は3%であった。この結果から、殆

どの保育者が何等かの形で技法あそびを保育に取り入れていることが明らかになったが、aの結果と照合すると、幅広いバリエーションでの実践はされていないことが理解出来る。また、取り入れている理由としては、「遊びかたを様々に広げたいため。子どもの経験を増やしたいため(43%)」という理由が最も多く、次いで「年齢が低くても出来る。(描くことができなくてもできる)対応年齢の幅広さ(24%)」や、「自ら予測して描く作品と異なり、選ぶ材料、技法により生み出される作品はその都度変化していく。作品の取り組みかたや作品から性格、成育状況を知ることが出来る(8%)」などの分析的な視点からの理由もみられていた。一方、少数ではあるが、取り入れていない理由としては、「年齢の低い子どもには、技法あそびよりも感覚的な遊びを心掛けている」や「造形あそびそのものに抵抗のある子がいるので無理強いさせていない」など技法としての難易度の理由が上げられていた。

- c, 「技法あそび」適用年齢

「主に何歳児で実践されているか」についての回答結果は以下の通りである。

表2 年齢別技法遊びの実践状況

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
人数(名)	7	18	26	35	49	41	27

保育者は、特に4、5歳児において多く実践していることが分る。この結果は上記設問②の結果にもあるように、保育者は技法あそび適齢期を「経験が広がる時期」として把握していることから推察できる。

- d, 子どもの活動の様子

「実践時の子どもたちの様子について」に対する回答結果は、「日常的にあるものから、様々な表現が生れることに興味を大きくしている。

(56%)」が最も多く、次いで「回を重ねるたびに、子ども自身が技法を工夫して、予測して制作する。(17%)」、「出来上がったものについて鑑賞ができる(10%)」という回答が得られた。ま

た、「あまり興味を持たない子どももいる。特に2歳児は過半数が遊ばない。怖がったり、汚れを嫌がる子どももいる」という回答も少数ではあるが存在している。

これらのことから、幼児自身、技法あそびの楽しさを味わっていることが理解できる。また、幼児は、活動過程そのものを楽しむだけではなく、偶然的な表現についての操作や読み取りにまで興味を持っていることが分る。

#### e, 作品の読み取り・評価の視点

「保育者の作品観について（読み取り、評価のポイント）」についての回答結果では、「その子らしさがあるか、興味を持っているのかどうか（40%）」が最も多く、次いで「偶然性の驚きや見立ての拘りの度合い（17%）」、「線の太さ、荒さ、構成、完成度（13%）」というような回答が得られた。このことから、保育者は、その子なりの作品に対する価値観や興味、取り組む姿勢から作品を評価していることが理解出来る。また、少数ではあるが、作品分析的な視点の回答が存在した。

#### f, 「技法あそび」についての意見

「技法あそびに関する意見」の回答結果では、「技法遊びは、指導的であり、子どもたちから自発的に出来る遊びではない。一つの経験として取り入れ、その後、自発的にやる意欲が育てばよい（14%）」が最も多く、次いで「描画とは全く違う形が出来るので想像性も更に広がると思う。また、デザインの出来具合に保育者も驚かされる（13%）」、「大いに取り入れたい（10%）」など積極的な意見も確認出来た。一方、「いろいろな技法は知ってはいるが、実際に実践にいたることが少ないので、改めて子どもたちとの実践に取り組もうと思った」や「自分自身、造形が苦手な

のでどうしてもさけてしまう」などの保育者側の環境構成の問題も存在している。

保育者は、技法あそびの面白さ・効果を認識しているながらも、活動中の幼児の自発性や指導展開に難しさを感じているようである。また、保育者自身の力量に幼児の経験が左右されていることも推察出来る。

#### (3) まとめ

本調査から、保育者は、たくさんの技法あそびの種類を知り得てはいるものの、実践を行っている割合は極めて低いといえる。さらには、技法遊びの種類を限定し、限られた種類が繰り返し実践されているということが考えられる。

幼児の活動の様子としては、「様々な表現が生れる驚きがある」や「活動回数を増す毎に表現を予測して技法を操作する」など幼児が活動の楽しさだけに留まらず、偶然の表現への操作や読み取りにまで興味を示していることから、保育者側の援助内容が重要になってくると思われる。これに対して、保育者の評価のポイントは、「その子らしさがあるか」「興味を持って取り組んでいるのか」など、活動の過程を重んじた視点が多く、幼児の興味部分である表現跡そのものへの評価ポイントが欠けていることが確認出来た。

今後、保育者の活動実践力と作品の表現そのものに対する直接的な働きかけ、読み取りに期待する部分が大きく、そのための養成課程のプログラム内容も再考する必要があると考える。

#### 参考・引用文献

- 1) 1926, ジャンヌ・ピュシュ『博物誌』
- 2) 1997, 若桑みどり『エルンスト』美術出版社
- 3) 1998, 金山和彦『美術教育』日本美術教育学会誌 第277号 P100